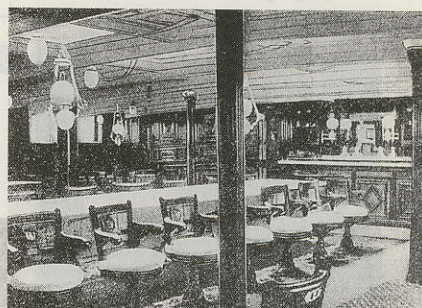


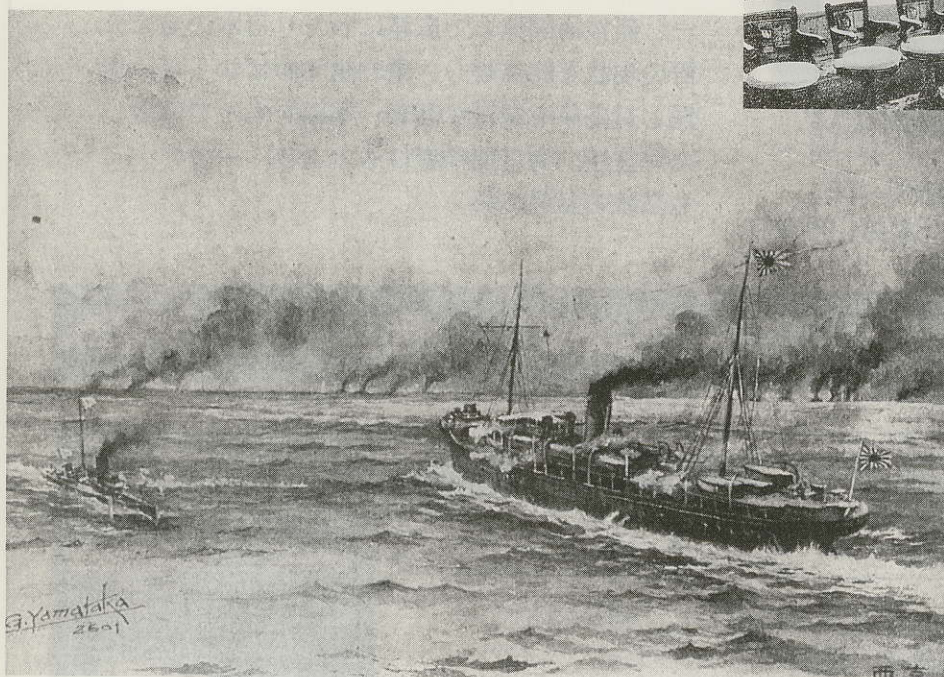
西京丸

《主要目》客船、鋼製、日本郵船所屬、2,913総トン、主機三連成汽機1基、出力3,240馬力、最高速力14.4ノット、船客定員一等32名、2等39名、3等 270名、1888年英ロンドン&グラスゴー社建造、同型船「神戸丸」

公室にピアノを備えた 日本で最初の船



(上)西京丸の1等ダイニングサロン
(下)黄海海戦の西京丸(山高五郎画・千歳書房『日の丸船隊史話』より)



船上のオーケストラ演奏会

現代のクルーズ船のラウンジやシアターにはたいてい大きなステージがあり、照明や音響なども整っている。カリブ海のメガシップのレベルになると、都会の音楽ホールと比べてもまったく遜色がない。ショーやリサイタルはむろんのこと、やろうと思えばオーケストラ演奏会だってできる。

プロのオーケストラが、小型客船で演奏会を開いたこともある(音響的に問題があったが)。九二年夏の暑い夜、筆者は東京湾のベイクルーズ船「シンフォニーⅡ」(現シンフォニーモデルナ)のレセプションホールで東京フィルハーモニーの演奏を聴いた。同船のプレデビューコンサートであった。

当夜の曲目はヘンデルの「水上の音楽」、ベートーベンのピアノ協奏曲「皇帝」(第一楽章)、交響曲「運命」というポピュラーなもの。これにアンコールとしてバッハの「G線上のアリア」が付いた。ちなみに同船のピアノは、ヤマハのグラランドピアノである。

航走する船上でのオーケストラ公演は、日本ではこれが初めてのことだった。器楽や声楽や室内楽は、日本のクルーズ船でしばしば行われているが、オーケストラのコンサートは実例が少ないようだ。

三浦環が「浅間丸」で熱唱

戦前の客船にも、ステージ付きの公室があった。よく知られているのは北米航路の「浅間丸」クラスの一等ラウンジである。ピアノはグランドピアノ。ステージが狭いので、ステージ下のフロアに置かれた。

二九年秋の「浅間丸」の処女航海では、アメリカを公演中の世界のプリマドンナ三浦環がステージのこけら落としに出演し、「蝶々夫人」の「ある晴れた日に」を熱唱して船客たちを喜ばせた。こけら落としのため、特別に出演を依頼したのであろう。

現代のようにエンターテイナーが常時乗っているケースは、戦前の日本船では少ない。だが、なかったわけではない。

明治の末、北米航路の「地洋丸」には、東洋音楽学校出身の波多野福太郎ら五人の若者が乗り組み、一等応接室でサロン音楽を演奏した。プロの音楽バンドによる船上演奏は、日本客船ではこれが初めてで、同時に日本のジャズの始まりでもあった。

「地洋丸」や欧州航路の「賀茂丸」クラスのピアノはグランドピアノだが、この時期より古い船では、弦を縦に張ったアップライトピアノが使われた。なにせ公室のスペースが狭いので、これは当然である。

ピアノを備えた最初の日本船

ところで、日本船の公室にピアノを備えるようになったのは一体いつごろだろうか。

筆者の知るかぎり、上海航路の「西京丸」（さいきょうまる）の一等公室に置かれたアップライトピアノが最初である。一八九八年の「旅行案内」にこんな記事がある。

―会談室、喫煙室に行けば「ピアノ」諸種の西洋戯具等悉く備はらざるはなし―

つまり、船客の遊び道具としてピアノを備えていたのだ。おそらく、公室の飾りぐらゐに考えていたのだろう。当時はピアノを弾ける船客が少なかったし、楽器としての完成度も今ほどではなかった。

会談室とは、遊歩甲板の下層にあった一等ダイニングサロンのことである。ピアノがここにあったのか、スモークングルームにあったのかは、この記事ではわからない。

ご承知のように「西京丸」は日清戦争の黄海海戦に代用軍艦として参加し、敵の巨弾を受けてサロンをめちゃめちゃに破壊された。ピアノは大丈夫だったのだろうか。

このとき同船には、海軍軍令部長の樺山資紀（かばやますけのり）が戦況視察のため乗船していた。樺山は薩摩出身の果敢な軍人だが、今では白洲正子の祖父といったほうがわ

かりやすいかもしれない。

本邦初のラグジュアリー客船

「西京丸」は日本郵船が創立後、イギリスに発注して建造した優秀船である。

大きさは二千九百トン。一八八八（明治二十一年）年に日本に回航され、姉妹船の「神戸丸」とともに横浜―上海航路に就航した。

郵船初の新造船は全部で八隻あった。すべてイギリス製である。のちにシアトル航路の第一船となった「三池丸」（三千三百トン）が最大だが、旅客設備の面では「西京丸」クラスが群を抜いていた。日本海運史上、最初のラグジュアリー客船と言っている。

郵船が三菱から引き継いだ海外航路は、日本から上海、仁川、ウラジオストクへ向かう三ルート。なかでも上海航路は最重要航路だったので、最優秀船が投入されたのだ。

日清戦争では十二センチ速射砲などを装備し、前述のように報知艦として従軍。日露戦争では海軍病院船になった。上海航路から撤退後は、青島航路などに転じた。

次いで第一次大戦後、室蘭の栗林グループに売却され、近海航路に就航していたが、一九二七（昭和二）年に大阪で解体された。

山田 進生